

## Y8-01

## 深谷赤十字病院における病棟常駐薬剤師の導入について

深谷赤十字病院 薬剤部

こいけ まゆみ  
小池麻由美、根岸美由紀、島田 雅弘、  
麻生 一郎

【はじめに】最近の医療では、医療財源を無駄なく活用し医療費の圧縮を図る上で、DPCの導入や後発医薬品の使用推進など、薬剤師を取り巻く環境も大きく変化してきた。深谷赤十字病院でも薬剤管理指導業務が薬剤業務の柱の一つとなっている。

今回、医療安全、医薬品の適正使用、医師ならびに看護師の負担軽減を目的とし、病棟常駐薬剤師の導入を1フロアで試みた。また試みの結果から他病棟での常駐も可能と考え、2フロアを拡大したので併せて報告する。

【方法】平成22年11月より6階（南病棟：循環器科・心臓血管外科、北病棟：腎臓内科・緩和ケア）の常駐化を試み、服薬指導、持参薬チェック、初期面談、処方代替入力、処方提案、疑義照会の件数ならびに実施率等を調査した。

【結果】6階は、常駐前と比較して、指導件数は約20%の増加、持参薬チェックは約30%の増加、疑義照会は約4倍、処方提案は約5倍、処方代替入力は4倍になったが、入院当日の初期面談に大きな変化はなかった。病棟での持参薬ならびに臨時処方の配薬トレーへの分配は、常駐前は行っていなかったが、常駐後は月平均75件となった。また、常駐後に実施した他職種へのアンケート結果から、病棟での医療安全における病棟常駐薬剤師の役割が大きいことがわかった。そのため、他の病棟でも早期に病棟常駐薬剤師を導入する必要があると考え、平成23年3月から5階、4月から7階病棟を拡大した。

【まとめ】今回、新たな業務展開を試行調査することで、実施可能か適切に判断をすることができた。今後も対象病棟の拡大を行い、チーム医療を推進し、医療安全、医薬品の適正使用、医師ならびに看護師の負担軽減に貢献したいと考える。また、病棟だけでなく、外来化学療法室、手術室や透析室などの常駐も今後の課題と考える。

## Y8-02

## チーム医療の利点を生かした呼吸ケアチーム活動の開始

富山赤十字病院 看護部

まつくら さちこ  
松倉早知子、浅生かおり

【はじめに】平成22年度診療報酬に呼吸ケアチーム加算が新設され、チーム医療による人工呼吸器の安全な管理および離脱に向けたケアが必要とされている。当院でも平成22年4月に呼吸ケアチームを発足し活動を開始した。

【活動目標】1.呼吸ケアチームに必要な人材を確保し人工呼吸器離脱へ向けたケアの実施、2.一般病棟における呼吸ケアの質の向上への貢献

【実践】チームは医師（麻酔科）1名、看護師5名（6ヶ月以上の専門の研修を受けた者2名、呼吸療法認定士の資格を有する者3名）、臨床工学技士2名、理学療法士3名で構成した。週1回ラウンド時は各職種から1名以上参加した。以前の一般病棟での人工呼吸器装着患者のケアは、気管挿管チューブの抜管事故等の恐れから体位変換の角度は浅く、口腔ケアは湿綿での清拭が多かった。ラウンドでは効果的な体位ドレナージを行うため、医師が患者の状態を確認、臨床工学技士が回路を点検し、看護師と理学療法士が完全側臥位を実施した。そして病棟看護師が安全な体位ドレナージが可能であること、喀痰喀出に効果があることを実感できるように関わった。同様に気管挿管中の患者の口腔ケアの必要性和安全な方法を病棟看護師に説明しながら実施した。

【結果・評価】平成22年度、ラウンド延べ回数は47回、診療した患者数は52人、人工呼吸器離脱に至った患者数は22人、平均人工呼吸器装着日数は20.0日であった。

人工呼吸器装着患者のケアについて、病棟看護師から「日中に体位ドレナージで喀痰喀出を促すと夜間の喀痰吸引の回数が減少し、患者は安楽に入眠できた」という言葉が聞かれ、患者の口腔内の清潔も保たれた。このようなケアが長期人工呼吸器装着からの離脱を図り歩行して退院できるまでの回復につながった。チーム医療の利点を生かした活動によって呼吸ケアの質が向上したと考えられた。